

## 世界展開力強化プログラム 海外派遣研修 実習報告書

【研修先】 タイ マヒドン大学ラマチボディ病院

【期間】 H26.4.7~5.2

神戸大学医学部医学科 6年 西脇智哉

私は平成 26 年 4 月 7 日から 5 月 2 日までの約 4 週間、世界展開力強化プログラムの一環としてタイのバンコクにあるマヒドン大学ラマチボディ病院で実習させていただきました。タイの病院を選んだ理由は 2 つあります。1 つ目は世界展開力強化プログラムの一環で、実習費・寮費・航空券代がかからないためです。これは非常に助かりました。学生が海外実習に挑戦しやすくなるので、素晴らしい制度だと思います（実際はさらに補助が出ます）。次に、熱帯感染症等日本で出会う機会がほぼない疾患を診てみたいと考えたからです。そのため初めの 2 週間は感染症科を選択しました。残りの 2 週間は色々な症例を診る事が出来ると考え、救急科で実習を行いました。

感染症科での実習は、毎日病棟での回診に参加させていただき患者さんの病状を英語で説明してもらい、教授からの質問に答えるという実習スタイルをメインに行いました。病棟を回ってまず驚いたのは HIV 患者さんの多さです。日本と比べてタイには HIV 患者さんがとても多く、鑑別疾患を挙げる際にも必ず話題にのぼり、その有病率の差を実感しました。その他にも東南アジア諸国で多い感染症を診させていただきました。感染症科の回診では薬剤師の方が一緒にラウンドし、活発にディスカッションを行っていたのが印象的でした。



救急科では毎日午前 8 時から午後 4 時まで実習を行いました。まず、朝一番に放射線科との合同カンファレンスが開かれ、その後はラマチボディや他大学の学生と共に患者さんを診察させていただきました。タイの 6 年生はまるで日本の初期研修医の様に実際に患者さんをファーストタッチで診察し、カルテを書き、上級医からフィードバックを受けており、その慣れた手つきを見て自分



との差を実感しました。実際の患者さんに触れ、主体的に学ぶ環境は日本よりも整っていると感じました。また、タイでは医学用語を英語で学び、英語の教科書を使用する事が当たり前であるため、ほぼ全ての学生・医師が英語をツールとして使いこなし、話す事が出来るという点においても勉強不足を実感しました。

救急外来では Dengue 熱や電撃熱傷等珍しい症例も診る事ができ、実習を通して多くの学生や医師と交流する事が出来ました。タイ語も英語もあまり話す事が出来ない Todd 麻痺疑いの日本人患者さんが入院しており、病歴聴取に際して役に立つ事もでき、救急科では多くの貴重な経験をさせていただきました。

4月にはタイの旧正月があり、有名なソンクラーンという水掛祭りも楽しむ事ができます。ラマチボディ病院は最寄りの BTS の駅からすぐに中心部に出られるため、実習が終わった後にも気軽に出かける事が出来ます。ほぼ毎日の様にお世話係の学生がご飯や様々な観光名所に連れてってくれたおかげで 4 週間はあっという間に過ぎ、実習以外の面でも存分にタイの文化を楽しみました。彼らは本当に皆良い人ばかりで、今でも親交があります（神戸大学に実習にも来てくれました）。この 4 週間で素晴らしい思い出と友人を得る事が出来ました。

タイでの実習を有意義なものにするためには、日頃から医学英語をきちんと学んでいく事が大切だと感じました。単語を理解できていないと話をつかむ事が難しく、実習をスムーズに行う事が出来ず苦勞する場面が何度もありました。私は英語が得意ではないので、周りの友人に助けをもらう事も多々ありましたが、とにかく挑戦すれば何とか出来ます。また、医療関係者以外の多くの人々は英語が通じないので（タクシーも！）、少しタイ語を覚えておくによりタイでの生活を楽しむ事が出来ると思います。

最後に、久野先生やグローバルリーダー育成センターの皆様をはじめ、このプログラムに関わった全ての方に感謝致します。ありがとうございました。

